

The Bridges of Madison County に含まれる

ハイフン付き複合語の文体レベルからの考察

大 賀 信 孝

(1997年9月24日)

英字で書かれた記事，小説，伝説その他を読んでいるとハイフン付き複合語に出くわす。それからいけば，語として必要だからハイフン付き複合語は使用されているということになるが，それだけでない場合もある。

前者—語としての必要性—の例としては Agatha Christie が著した *And Then There Were None* を参照していただきたい。この作品では確かにハイフン付き複合語を見かけるし，数量的に例が極端に少ないともいえないが，しかし作者が何かを狙って意図的にハイフン付き複合語を使用しているとはいえない。つまりは文構成に必要な語だから，という理由だけでハイフン付き複合語を使用しているものと思える。

次に後者—語としての必要性に限定されない場合—の例としては，R.J.Waller が著した *The Bridges of Madison County* がある。彼はこの作品の中でハイフン付き複合語をもちろん語として必要だから使用しているのではあるが，それだけでなくこれに加えて別の理由で使用している。つまり文中である効果を表わすため使用したり，その他のため使用したりしているのである。

以上のような具合である。このように二人の作家の二つの作品を分析してみると，ハイフン付き複合語の使用方法に違いがあることが分かる。さてそこでこの違いなのであるが，この違いは作家のハイフン付き複合語と文体との関連認識の違いに起因しているといえる。つまり Agatha Christie にはハイフン付き複合語と文体との関連意識はないのである。ところが一方 R.J.Waller には，ハイフン付き複合語を文体構築に貢献させるという意識が働いているのである。

こうしたことより，ハイフン付き複合語が単に複合語のレベルで判断すればいい場合と，文体レベルで判断したほうがいい場合とにわかれる。言語学的立場よりいえば，これらのうち前者に目新らしさはないが，後者はハイフン付き複合語活用の新しさの指摘につながるので重要である。よって今回の論文ではそうした重要性に基き，*The Bridges of Madison County* のハイフン付き複合語を文体レベルで考えてみたいと思

う。方法的にはハイフン付き複合語が文中で果たす機能——機能の違いで文体的意味合いが異なることもあるので——についてまず考察し、その後文体的考察に入っていくことにする。

I Numeral+Hyphen+Numeral 形式の複合語

Numeral+Hyphen+Numeral(これ以後 N+H+N と省略)形式の複合語は日頃種々の英文で見かける。決して珍しいものではない。だから *The Bridges of Madison County* でもその存在は確認でき、しかもそれらの複合語は機能的に分類できるような状態を呈している。なお具体的にこのことを説明すれば、(a)形容詞として機能するか、(b)補語として機能するか、(c)前置詞の目的語として機能するかしている N+H+N 形式の複合語が、*The Bridges of Madison County* に含まれているということである。

よってこれ以後はこうした分類を基に例を区分してみる。まずは(a)の場合であるが、この(a)の項目に入る例の数は12であり、その12例中10例は

She sat in a chair by the window, looked at the addresses, and concentrated, for contained in them was the movement of his hands, and she wanted to bring back the feel of those hands on her twenty-two years ago. (p.24)⁽¹⁾

上記例を含めて総て N+H+N の後に years old という 2 語はこない(つまり年齢に言及していない)。ところが一方残りの 2 例はこれと異なり、N+H+N の後に years old が付加されている。そのような 2 例の内の 1 例は

She was sixty-nine years old at the time of her death. (p.173)

である。

次に (b) の場合であるが、(b) の場合この項目に入る11例全部 N+H+N 形式の複合語の後に years old が省略されている。1 例をあげれば

She was forty-two, bright, and a nice person, but he didn't love her, would never love her. (p.8)

である。

最後に (c) の場合であるが、(c) の例の数は多くない。全部で 6 例であり、その内 3 例は N+H+N の前の the age of を省略したもので、残り 3 例は時を表現している N+H+N 形式のものである。おのおののケースの例を一つずつあげると

At fifty-two his body was all lean muscle, muscle that moved with the kind

of intensity and power that comes only to men who work hard and take care of themselves. (p.31)

Then he added, "If you want to come along while I'm shooting, that's fine. It won't bother me. I could stop by for you about five-thirty." (p.91)

というようになる。以上が機能的な分類である。

次に文体的立場から N+H+N 形式の複合語を考えてみる。まず (a) に関しては年齢に関係しない複合語10例に対して年齢を表現する複合語2例ということから、数量的に少ない後者は例外といえ、よって N+H+N 形式の複合語は後に years old と続かない場合に形容詞として働くというのが、文構成の基本パターンになっている。

次に (b) に関しては11例全部に例外がない。統一がとれている。でもこうした統一は意図的なものであろうか。それとも偶発的なものであろうか。疑問となるところだが、答えは「意図的である」ということになる。その理由は作者に表現を簡潔にするという意識があり、それが働いて補語は years old が省略され簡潔になっているからである。

最後 (c) に関しては例となっている複合語が (b) の例同様簡潔である。よってここでも表現を簡潔にするという意識が働き、実現されているのが分かる。

II 色を表わすハイフン付き複合語

The Bridges of Madison County は "There are songs that come free from the blue-eyed grass, from the dust of a thousand country roads." (p.xi) という文で始まっており、ここに早くも "blue-eyed" という色を表わしているハイフン付き複合語が現われこれ以後も現われる。

さてこうした色を表わすハイフン付き複合語だが、機能的には2種類に分けられる。つまり (a) 形容詞として機能するものと、(b) 動詞の目的語として機能するものとのである。前者 (a) の例としてはすでに引用した "blue-eyed" を含む例以外、次のものを含め

His silver-gray hair hung well below his ears and nearly always looked disheveled, as if he had just come in from a long sea voyage through a stiff wind and had tried to brush it into place with his hands. (p.29)

例の総数は11である。

次に (b) の例だが、(b) の例としてはただ次の1例だけ存在する。

There was a kind of austere beauty to this place, and he stopped several times, set up a tripod, and shot some black-and-whites of old farm buildings. (p.6)

以上が機能面からの分類である。

次に文体面から考えてみると、これら色を表わしている複合語は文中で視覚効果を生むために活用されているといえる。つまり文中での視覚効果がいかに読者のストーリーイメージ形成に有効かを作者は知っているから、ハイフン付き複合語にその目的にそのような働きをさせているのである。

III Noun+Hyphen+Noun+ed 形式と Adjective+Hyphen+Noun+ed 形式の複合語

ハイフン付き複合語といっても、それを構成している単語の品詞の違いを基に種類分けをすると、さてけっこうな数になる。そうした中で、*The Bridges of Madison County* に現われ文体との関連でここで取り上げるのは2つのタイプのもの——Noun+Hyphen+Noun+ed (これ以後 N+H+N+ed と省略) と Adjective+Hyphen+Noun+ed (これ以後 A+H+N+ed と省略)——であるが、これら2つのタイプのものには共通点がある。それはどちらにも ed (suffix) が付いていることだが、この ed (suffix) は“(in adjectives) having a — : a bearded man (=a man with a beard) / a kind-hearted woman” (p.B11) と *Longman Dictionary of Contemporary English, new ed.*, (Longman, 1991) で述べられているように、形容詞として機能する複合語に含まれている。そのことからいえばこの項のハイフン付き複合語の機能は、形容詞としての機能のみに限定していいのではないかということになる。でも実際はそれでは不十分で、もう一つの機能を設定せざるをえない。それというのもこの項のハイフン付き複合語は、形容詞としてのみの本来の機能から発展して、補語の機能を果たしているものも発見できるからである。その結果(a)形容詞としての機能と、(b)補語としての機能の2つの面が N+H+N+ed 形と A+H+N+ed 形の複合語にはあるということになる。これが N+H+N+ed 形と A+H+N+ed 形の複合語の機能に関する結論である。

次にこうした機能を基に例を分類してゆくと、N+H+N+ed 形の複合語で (a) の例としては次のものがあり、

The physical images were inscribed in her mind so clearly that they might have been razor-edged photographs of his. (p.125)

(このタイプの合計例数 4)

N+H+N+ed 形の複合語で (b) の例としては次のものがあり、

The back window was rain-spattered, but part of his head was visible. (p. 146) (このタイプの合計例数 1)

A+H+N+ed 形の複合語で (a) の例としては次のものがあり、

At a pond he stopped and shot some reflections on the water made by an odd-shaped tree branch. (p.7)

(このタイプの合計例数 11)

A+H+N+ed 形の複合語で (b) の例としては次のものがある。

He saw himself as one of the last cowboys, as he put it, and called himself old-fangled. (p.179)

(このタイプの合計例数 2)

以上が具体的な機能分類である。

次に文体面の考察に入るが、まずはそのために *BBC English Dictionary* (Harper-Collins Publishers, 1992) の“-ed”の項を見ていただくと、“SUFFIX-ed is also added to nouns to form adjectives which describe someone or something as having a particular feature.” (p.358) と述べられている。なおこれは Noun+ed 形の解説であり、この項の複合語についての解説ではない。ゆえに一見この項の複合語とは無関係のようだが、実は関係がある。上記引用文中でこの項の複合語にもあてはまる部分があるからである。つまりそれは“...describe someone or something as having a particular feature.”という働きの部分で、こうした働きは N+H+N+ed 形の複合語も A+H+N+ed 形の複合語も果たしている。よって文中で“particular feature”を表現するという働きがこれら複合語にある以上、それらは文体的な一つの働きをしているといえる。

IV Paraphrase 中のハイフン付き複合語

作家が paraphrase を行う場合、その作家は丁寧な説明をこころがけてそうしているのだが、この *The Bridges of Madison County* でも paraphrase によつての丁寧な説明がなされている。そのこと自体は一般的なことで何ら珍しいことではない。でも *The Bridges of Madison County* では

But there was something, something about him. Something very old, something slightly battered by the years, not in his appearance, but in his eyes.

(p.38)

というような一般的な paraphrase 以外に変わった paraphrase がある。つまりハイフン付き複合語を含んだ paraphrase なのである。なおこのような例は複数あり、機能的には (a) 形容詞として働いたり、(b) 副詞として働いたりしている。そうした例を具体的に示せば、(a) の例としては

“Hi. Nice to see you. Pretty hot,” he said. Innocuous talk, around-the-edges-of-things talk. That old uneasiness again, just being in the presence of a woman for whom he felt something. (p.96)

(このタイプの合計例数 3)

というものがあり、(b) の例としては

“I mean”—his voice was a little shaky, a little rough—“If you don’t mind my boldness, you look stunning. Make-’em-run-around-the-block-howling-in-agony stunning. I’m serious. You’re big-time elegant, Francesca, in the purest sense of that word.” (p.110) (このタイプの合計例数 1)

というものがある。

さて以上が paraphrase 中のハイフン付き複合語の機能だが、これらは文中で他の役割も果たしている。つまりそれらは修飾語として働くことで、その他の平凡な修飾語とは違う強い調子をだすという役割も果たしているのである。前述した (a) の場合も、(b) の場合も、それぞれ名詞“talk”と形容詞“stunning”の前に冗長ともいえるハイフン付き複合語が配置されているのはまさしくその理由からである。よって強い調子での修飾語の役割を果たすハイフン付き複合語は、一つの文体機能を果たしているといえる。

V Simile または Metaphor に関連するハイフン付き複合語

さて simile, metaphor というと rhetoric の領域に含まれる表現技法だが、これらの実例がハイフン付き複合語そのものであったり、またそれを含んでいたりして、*The Bridges of Madison County* に現われている。具体的に示してみると、まず simile については

He held the door, closed it behind her, then went around to the driver’s side and with a peculiar, animal-like grace stepped in behind the wheel. (p.36)

(このタイプの合計例数 1)

上記のような例があり、ここではハイフン付き複合語だけで simile 表現になっている

る。

次に metaphor としては

In an increasingly callous world, we all exist with our own carapaces of scabbed-over sensibilities. (p.xvii)

(このタイプの合計例数 5)

上記のような例があり、ここでは“scabbed-over sensibilities”で metaphor 表現になっているので、“scabbed-over”は metaphor 表現の半分を構成するハイフン付き複合語になっている。

以上のような例がある。これが simile, metaphor とハイフン付き複合語との関係なのだが、こうした関係を持つハイフン付き複合語は文中では形容詞として機能し、文体面では「表現を効果的にすること」⁽²⁾のために貢献しているのである。

ま と め

ここまでこの論文では、*The Bridges of Madison County* 中のハイフン付き複合語を文体レベルから考察してきた。その結果判明したことは、ハイフン付き複合語が簡潔な表現を実現するために貢献したり、視覚効果を生む役割を果たしたり、人物もしくは物の特徴描写の役割を担ったり、強い調子の修飾語として働いたり、表現を効果的にするために役立ったりしているということである。

注

- (1) 作品よりの引用はすべて *The Bridges of Madison County* (A Time Warner Company, 1995) からのものである。
- (2) 林 四郎 (編), 「例解新国語辞典」(三版), (三省堂, 1991) P.425.

参 考 文 献

- Bauer, L., *English Word-formation* (Cambridge University Press, 1983).
Blake, G. and Bly, R.W., *The Elements of Technical Writing* (Macmillan, 1993).
Crystal, D., *The English Language* (Penguin Books, 1988).
English Guides: 2 Word Formation (HarperCollins Publishers, 1991).
Greenbaum, S. and Quirk, R., *A Student's Grammar of the English Language* (Longman, 1990).
Leech, G., *Introducing English Grammar* (Penguin English, 1992).
Shertzer, M., *The Elements of Grammar* (Macmillan Publishing Company, 1986).
Zandvoort, R.W., *A Handbook of English Grammar*, 7th ed., (Maruzen, 1975).